2022 年 1 月 30 日佐土原キリスト教会
聖書箇所：マルコ福音書 3 章 13～19 節
説教題：私達の 3 つの使命

バンクーバーにいる時に、ある方に誘われて、ホームレスの人達に食事を提供しながら伝道する働きをしている牧師先生に会いに行ったことがあります。大通りから少し引っ込んだ通りにあるビルの 1 階で集会がなされていました。そこには多くのホームレスの人達が集っていました。私達が訪ねた時は、実は大変な時だったらしく、その集会があるために、そこにホームレスの人達が集まって来るので、近所の人達が「どこか他所に行って欲しい」という運動をして、集会は立ち退かなければならないかも知れない、という状況だったようです。そういう切羽詰まった状況で礼拝をしておられましたから、牧師は「私達にはイエス様がいるじゃないか、イエス様が助けて下さる」と参加者に言って、ワーシップソングを、涙を流しながら歌っておられたのが非常に印象的でした。礼拝と食事が終わった後、先生と個人的に話をしました。「大変な働きだと思いますが…」と言ったら、先生は「色々な働きをして来たけれど、今が一番恵まれた心境です」と言われました。私は「色々な伝道の働きがあるのだな」としみじみ思いました。

今日の箇所は、イエス様が「12 弟子」を選ばれる個所です。12 人の中には、ペテロのように有名な人もいますが、名前だけしか分からない弟子もいます。しかしそれぞれの弟子が、それこそ涙を流しながら色々な働きをして、伝道したのだと思います。その働きによって、キリストの教会は、立ち上がって行ったのです。

13～14 節に「イエスは山に登り、ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとに来た。そこでイエスは十二弟子を任命された」(13～14)とあります。イエス様は、ガリラヤ伝道のある時点で、弟子達の中から「12 人」をお選びになり、いわゆる「12 弟子(12 使徒)」を形成されました。「12」という数字は「イスラエル 12 部族」に因んだ数字でしょう。イスラエルが奴隷の地エジプトから脱出する様子を記録する「出エジプト記」で、指導者モーセは、山の上で神から新しい使命を与えられ、それを民(12 部族)に語るように命じられ、語り聞かせました。「あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」(出エジプト 19:6)。同じように、山の上でイエス様から新しい使命を受けたこの 12 人によって、今に続く「新約の神の民」は創られ、「神の御業」は始まるのです。

では、彼らに与えられた使命とは何でしょうか。3 つの使命があります。第 1 に「彼らを身近に置(くため)」であり、第 2 に「彼らを遣わして福音を宣べさせ(るため)」であり、第 3 に「悪霊を追い出す権威を持たせるため」でした。12 弟子の 1 人ペテロは、後に教会の信者にこう書き送りました。「あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です」(1 ペテロ 2:9)。かつて神がイスラエルに語られたその言葉を、諸教会のキリスト者に向けて「あなた方こそ、その役割を与えられた者なのだ」と語ったのです。その意味でこの 3 つの使命は、弟子達だけではなく、「イエスを信じる全ての信者(私達)に与えられているもの」だと言うことが出来ます。今日は「私達に与えられている使命」について学びます。

1: 「彼らを身近に置く」～主に繋がる

「最初の使命」は、「彼らを身近に置(くため)」ということです。この 12 人についての情報は、ペテロを除いて限られています。「ペテロ」、「ヤコブ」、「ヨハネ」、「アンデレ」の 4 人は漁師でした。「ピリポ」は、詳しく分かりませんが、朴訥な人柄だったようです。「バルトロマイ」は「ヨハネ 1 章」に登場する「ナタナエル」と同一人物だろうと言われます。「マタイ」は取税人でした。「トマス」は「疑り深いトマス」と呼ばれるようになる人です。「アルパヨの子ヤコブ」については名前しか分かりません。「熱心党員シモン」、熱心党は当時、サドカイ派、パリサイ派等に続いて 4 番目の勢力を持っていたグループで、国粋主義的な人の集まりでした。「シモン」も「ユダヤ命」と

いう感じの人だったと思います。「タダイ」は、他の福音書に「ヤコブの子ユダ」として登場して来る人でしょう。最後にイエス様を裏切った「イスカリオテのユダ」、これが構成メンバーです。

このリストを見て感じることは、彼らがバラバラな人達であったということです。特に代表的なのは「取税人マタイ」と「熱心党のシモン」です。取税人というのは、外国の支配者ローマ、あるいはローマに助けてもらっている権力者のために働いていた人達です。一方、熱心党というのは、ユダヤの栄光と純粋性を守るためには命も投げ出す覚悟をしていた人達です。「熱心党のシモン」にとって世の中で最も赦せない人間は、「取税人マタイ」のような人だったのです。当然、取税人も、熱心党のような人達を嫌っていました。彼らはそういう間柄でした。イエス様の 12 人の弟子団の中には、そのように憎しみ合うような立場の人々もいたのです。やがて裏切り者になる「イスカリオテのユダ」のような人まで含まれています。

問題は、そのような彼らが、どうして一緒にいることが出来たのかということです。結論から言えば、彼らはお互い同士が繋がり合っていたのではなく、1 人 1 人がイエス様に繋がっていた、彼らの繋がりはイエス様との縦の繋がりを土台とした横の繋がりだった、ということです。1 人びとりがイエス様に繋がることによって、結果としてバラバラな人達が共に 1 つのグループを形成することが出来たのです。それが弟子団の姿でした。

カナダで私達が所属していた教派は、当時、ある問題を抱えていました。そのために何回か会議が持たれました。その問題については色々な立場の意見があって、すんなりとは結論が出ない状況でした。しかし、会議の前には必ず 15 分程、少人数のグループに分かれて、皆が神の前に静まって、神の導きを求めて祈りました。意見は違う、立場は違う、しかし同じ神を「私の主」と仰ぎ、神の御心を求めようとする、その姿の中に、議論はあってもやがて問題が解決されて行く力のようなものを感じました。

教会とは、気心の知れた人達が楽しく集っている場所ではありません。教会で唱えられる「使徒信条」という信仰告白の文章があります。その中に「我は…教会を信じる」という告白があります。「教会を信じる」というのは、「教会の中心にイエスがおられることを信じる」、あるいは「イエスの導いておられる教会であることを信じる」ということだと思います。教会とは、中心におられるキリストの回りに罪人が集まっている、そういう場所です。集まっている人々は、年齢も、生まれも、育ちも、性格も、好みも、背景も、考え方も、それぞれに違う人々です。しかし大切な共通点があるのです。それは、1 人びとりがイエス様との関係で集まっているということです。イエス様が、1 人びとりをご自分の働きのために無くてはならない存在として集められたのです。

だから、1 人びとりがイエス様との交わりを深めることは、教会の祝福にもなるのです。だからこそ、イエスは彼らを身近におかれたのです。彼らは、イエス様の傍にいて、イエス様に学び、御言葉を心に蓄えたのです。そして主の器として変えられて行くのです。「イエス様が彼らを身近に置く」、それは私達の側から言えば、「私がイエス様の身近にいる」ということであり、それはまた「イエス様が私の身近にいて下さることを信じる」ということです。その時、イエス様を中心とする集団は、違う者の集まりだからこそ、多様な働きをして行ける集団になるのです。

2:「彼らを遣わして福音を宣べさせる」～「神の支配」を語る

そのことは「2 番目の使命」である「彼らを遣わして福音を宣べさせ(るため)」にも関わって来ます。彼らはイエス様に遣わされます。遣わされて何をするかというと、イエス様と同じように「神の国は近くなった—(いや神の国は今来ている。神の支配は始まっている)」ということを語るのです。しかし、私達に何が語れるのか。私達は自分でも自分の弱さに泣いているような者です。何か特別なことが出来るわけではない、特別の力があるわけでもない、人より素晴らしく立派に生きているわけでもありません。しかし、弱さを抱えながらも、神に生かされる時、「確かに神は生きておられる」ということを語ることが出来る。自分に働いて下さった神の御業、身近な人に働いて下

さった神の御業、それを語ることによって「神の恵み」を証しすることが出来るのです。
聖書は言います。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます」(1 コリント 10:13)。私達もこの経験を与えられます。それを語ることによってどんなに暗い状況に置かれている方に対しても「でも、神の支配は来ているのですよ」と語ることが出来るのです。こんな話を聴きました。ある方が信仰を持たれました。しばらくして、お金に困ってどうして良いか分からない時期があったそうです。ある時、バスに乗ったら、偶然親戚の人と乗り合わせました。それは、どう考えてもあるはずがないことでした。でも起こったのです。自分からその方の家にお金を借りに行くことは、どうしても出来なかったけれど、バスの中で世間話をする中で「実は…」と現状を打ち明けることが出来たそうです。そしてその話を聞いた親戚の人が配慮して下さって、そこを通ることが出来たそうです。「神様に救われました」と言われました。
試練の中でも特に辛いのは、自らが作り出してしまったように思える試練です。自分を責めざるを得ない時、私達は罪責感で苛まれます。しかしパウロは次のように言います。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ 8:28)。私達が神を信じる時、否定的に見える状況をさえ、神はひっくり返して「私達にとっての『善』」として下さると言うのです。イギリスのある有名な牧師は「この『すべて』には、あなたの失敗も含まれているのです」と語ります。私達はそのような素晴らしいメッセージを託されているのです。
前にもお話ししましたが、H 兄という方は、バンクーバーで英語の勉強をしたいと思って、カナダ人の友人に「教会に行きたい」と言ったら、その友人が日系の教会に連れて行ったのです。そこで信仰を持たれたのです。数年後、すでに日本に帰っておられた H 兄は、その友人の大病を知って、バンクーバーまで見舞いに行き、友人に向かってこう叫ばれました。「あなたとの素晴らしい出会いがあって…カナダに来る前は考えることも出来なかった人生にとって最大にして最高の宝である信仰を日本に持ち帰ることが出来たんだよ」。私達も誰かから「あなたとの素晴らしい出会いがあって…人生にとっての最高の宝を得たよ」と言ってもらえるかも知れません。私達は、伝えることが出来るのです。何でも良い。私達にその意思があれば、神様が用いて下さるのです。祈ることから始めたいと思います。

3:「悪霊を追い出す権威を持たせる」～主の働きを分かち合う

「3 番目の使命」は、「悪霊を追い出す権威を持たせる」ということです。この言葉が私達にも語れているとすれば—(そして「そうだ」と信じますが)—私達にも「悪霊を追い出す権威」が与えられていることになります。「悪霊の働き」というのは今も現実です。特に南米とか東南アジアの密林に出かけて行く宣教師にとって、静かに聖書を語っているだけではどうにもならない、「悪霊に苦しむ人のために神に祈って悪霊を追い出す」というような伝道をせざるを得ない状況があるわけです。だから彼らは、そういう形で悪霊と対決して神様を示して行く。そして神様もその祈りに答えて下さるのです。もしかしたら、日本に暮らす私達にも、いつかそのような状況が訪れるかも知れません。この前も「ある教会で悪霊払いの儀式をされた」という話を聞きました。悪霊の働きは現実です。神様が悪霊の働きを縛って下さるように祈ることは、大切だと思います。
しかし、このことをもう少し私達の身の丈に合ったレベルで考えたいと思います。ある方のお兄さんが大学 4 年生の時に自殺をしました。それによって御両親は、立ち上がれない程の衝撃に襲われました。お母さんは新興宗教に助けを求めましたが、そこで聞かされたのは「あなたの過去の罪がこのことをもたらした」という言葉でした。お母さんはノイローゼ状態になり、お父さんは働く意欲を無くしました。家中の電灯は消され、線香の臭いが立ちこめる、お母さんは仏壇に向かって

泣いている、家の中のどこにも希望がない、光がなかったのです。そんな時、お母さんの知人が見るに見かねて聖書を持って来て、渡しました。お母さんは、「何か光が見えないか」と藁にもすがる思いで聖書を読み始めました。そして、ぶつかったのが「ヨハネ福音書」の御言葉でした。「弟子達は彼についてイエスに質問して言った。『先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか』。イエスは答えられた。『この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです』」(ヨハネ 9:2～3)。お母さんは、このたった 2 節の御言葉で救われるのです。この言葉に希望の光を見、神の愛を感じました。そして、その日以来、みるみる元気になって、信じられないような回復の生活が戻って来たのです。家族の人はその変化を見て、「ここにいのちがある」と分かって、信仰に導かれて行くのです。

私達には、悪霊の追い出し出来ないかも知れません。しかし、イエス様の言葉、神の言葉には、人の魂を覆って、辛くしている「闇」を取り去ってしまう力があるのです。「百万人の福音」には、ある方が「ただ礼拝に出るだけで、不安や恐れに襲われながらも、生きることに絶望せずにすみました」と証しを書いておられました。御言葉が働きます。そこに信頼を置いて、祈りつつ、祈りつつ、御言葉を蒔いて行きたいと願うことです。

終わりに

こんな話があります。「イエス様が地上の時を終えて天に帰られた後、天使長ガブリエルがイエス様に言いました。『主よ、人間達のためにひどく苦しまれたことでしょうね。でも人間達は、あなたが自分達をどれほど愛され、自分達のために何をされたか、それが良く分かったでしょう』。イエスは言われました。『いや、まだ分かっていない。今はパレスチナにいるほんの僅かな人々だけが分かっているだけだ』。ガブリエルは言いました。『では、全ての人にそれを分からせるために一体あなたは何をして来られましたか』。イエスは言われました。『私はペテロやヤコブやヨハネやその他の数人の人々に、私のことを伝えることを生涯の仕事にするように依頼した。他の人々はさらに別の人々に伝え、また別の人々は、最も遠くの地に居る人々までが私のことを知るようになるまで伝えて行くだろう』。ガブリエルは言いました。『そうですか。しかし、ペテロやヤコブやヨハネが疲れて来たらどうするのですか。彼らの後に従う人々が、忘れてしまったらどうするのですか。あなたは何か外の計画でも立てておられるのですか』。イエスは答えられました。『私には外の計画はありません。私は彼らを当てにしています』」。私達もイエス様に当てにされています。主を業に励みたいと思います。